

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：33943

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530847

研究課題名(和文) 養育者の情動認知発達プログラムの開発 - 子どもの情動を読み取る能力の臨床的応用 -

研究課題名(英文) Development of the emotion development program of mother-Clinical application of the ability to perception of the emotion of the child

研究代表者

小原 倫子 (OBARA, TOMOKO)

岡崎女子大学・子ども教育学部・准教授

研究者番号：10450032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、養育者による”子どもの情動状態を読み取る能力”(養育者による子どもの情動認知と使用する手がかり)のメカニズムと発達プロセスをモデル化し、臨床的に応用して、子どもの情動がわからず育児不適応を生じている養育者の適応的な子どもへの関わり方を体験的にトレーニングする情動認知発達プログラムの開発である。その結果、養育者が読み取る情動及び手がかりの数と情動知能が育児困難感と関連するモデルが示された。更に養育者は乳児の表情等に焦点化された情報だけでなく、母親の内的表象(育児信念等)も利用して情動を認知している可能性が示唆された。これらの結果を応用したトレーニングプログラムを現在検証中である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study was to investigate changes in the perception of mothers toward infant emotions and use of context, and develop the perception of mothers developmental programs to train the way people relate to the Adaptive child caregiver applying to clinical development process model, do not perception the emotion of the child, child maladjustment resulting. Our results suggested that mothers perceive infant emotion not only on the basis of information obtained by focusing on the child, such as facial, behavioral, and vocal expressions, but also by observing context, such as an object being handled by the child, and the mother's internal attitude and beliefs regarding child rearing, and indicated that the sense of difficulty with child-rearing was related to factors of mother-child interaction, such as the number of perceived emotions and context, as well as emotional intelligence, a maternal factor.

研究分野：社会科学

キーワード：情動認知発達 養育者 子ども関係 日常的文脈 情動認知の手がかり

1. 研究開始当初の背景

従来の養育者の心理的発達における知見は、養育者になることによる主観的意識や自己概念の変化、育児に対する態度や意味づけの変化を明らかにしている(柏木&若松, 1994; 徳田, 004)。これらの研究は、生涯発達の視点から、養育者の主観的意識としての態度や意味づけの変化に焦点があてられており、子どもとの相互交渉の中で生起される養育者の変化そのものの検証は十分ではない。Emde&Sorce(1988)は、特定の情動に関する明確な仕種がない新生児に対しても、日常的文脈を基にして子どもの情動を読み取る養育者の応答性は、養育者-子どもの共感的過程に貢献すると述べている。また、養育者自らの育児の状況に対する現実知覚(評価)の様式が育児ストレスに影響することも示唆されている(氏家, 1995)それ故、養育者が子どもとの相互作用の中で子どもの情動をどう認知し、どのように解釈するかという認知的能力は、その後の子どもへの育児態度や応答行動に大きな影響を及ぼすことが推測される。

一方、子どもの情動発達の視点においても、子どもの情動表出は、事象と意味のある関連が見られない可能性が高いことが示唆されており(Oster et al, 1992)、養育者-子どもの相互作用の構造のなめらかさは養育者の能力により保たれていることが示されている(Kay, 1977)それ故、養育者による子どもの情動認知は、子どもの情動発達における社会的機能として重要な意味を持つことが考えられる。

しかしながら、これまでに日常的文脈における養育者の情動認知と応答行動の発達に関する研究はほとんど見られない。発達初期の不確かな情動表出を示す子どもの情動を、

養育者がどう認知し、その後の応答行動をどのように行っていくかについて明らかにすることは、安定した養育者-子ども関係のための重要な要因である。また、子どもの情動発達への影響という視点からも、養育者の情動認知と応答行動の発達プロセスの検証は必要である。小原(2013, 2014)小原・石井(2015)によれば、養育者による子どもの情動認知の発達の变化の特徴は次のように示されている。養育体験を重ねることにより、ネガティブな情動を含むより幅広い情動認知へと発達する。養育体験を重ねることにより、客観的な文脈だけでなく、養育者の主観的表象も手がかりとして利用して、情動を認知している。養育体験を重ねることにより、客観的な文脈から養育者の主観的表象へと利用する手がかりが移行し、主観的表象の利用と情動認知の正確さが育児困難感を軽減する。

これらの結果から、養育者の情動認知は、養育経験に伴い、発達の的に変化しながら育児困難感にも影響していることが推測された。今後はこれらの結果に基づいて、子どもの意図や情動がわからないために育児不適応を生じている養育者に対して、適応的な子どもへの関わり方を体験的にトレーニングできる情動認知発達プログラムの開発を検証していくことが課題である。更に虐待や発達障がいといった異なる養育環境や発達程度の差異による養育者の情動認知と応答行動の発達パターンの違いについてはほとんど明らかになっていない。以上の課題について妥当性のある調査方法の開発も含め体系的な調査計画に基づく、厳密な検証が必要であると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、養育者による”子どもの情動状態を読み取る能力”(養育者による子

子どもの情動認知と使用する手がかり)のメカニズムと発達プロセスをモデル化し、臨床的に応用して、子どもの情動がわからず育児不適応を生じている養育者の適応的な子どもへの関わり方を体験的にトレーニングする情動認知発達プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

【研究項目(1)】 養育者による子どもの情動認知と認知する際に使用する手がかりの発達プロセスのモデル化を半構造化面接と質問紙を用いた1年間の縦断調査によって検証した。

協力者: 3か月児を子育て中の養育者 12名

手続き: 3か月の子どもを育児中の養育者 12名を対象に、子どもが3ヶ月、6ヶ月、9ヶ月、12カ月の各時点において、3、6、9、12ヶ月の子どものビデオ刺激(15秒)を各5枚(計20枚)提示し、以下の項目についてインタビューを行った。

(子どもの情動を尋ねる質問)「赤ちゃんはどのような情動状態だと思われますか?」

(情動の読み取りに養育者が用いる手がかりを尋ねる質問)「そのような情動状態と思われたのはどのようなところからですか」

これまでの研究結果から、養育者が認知する情動の種類28カテゴリーと、認知する際に利用する手がかり7カテゴリーを生成した。また、養育経験を重ねることにより、認知する情動の種類が増え、客観的な文脈だけでなく、養育者の主観的表象も手がかりとして利用して、情動を認知している可能性が示唆された(小原,2013)。養育者は子どもの表情や行動、発声といった子どもに焦点化された情報だけでなく、遊んでいる対象や、養育者の内的表象(育児態度や育児信念)も利用して情動を認知している可能性が考えられた。更に、このような養育者による子どもの情動認

知と認知する際に使用する手がかりは、子どもが9か月時点で変化が認められた。

【研究項目(2)】 養育者による子どもの情動認知と認知する際に使用する手がかりのメカニズムのモデル化を半構造化面接と質問紙を用いた調査によって検証した。

協力者: 0歳児を子育て中の養育者 71名

手続き: 養育者による子どもの情動認知と認知する際に使用する手がかりについては、研究項目(1)と同様の手続きに基づいて実施した。また、養育者による「子どもの情動状態を読み取る能力」と関連することが考えられる育児困難感と母親要因である情動知能については質問紙調査を行った。

【研究項目(3)】 子どもの情動がわからず育児不適応を生じている養育者の適応的な子どもへの関わり方を体験的にトレーニングする情動認知発達プログラムを開発するために、養育者と養育者自身の子どもの相互交渉場面のVTR記録に基づき、養育者による「子どもの情動状態を読み取る能力」(養育者による子どもの情動認知と使用する手がかり)についてインタビューを行った。インタビューの内容は研究項目(1)、(2)で生成された発達プロセス及びメカニズムの複数のモデルとの比較検証により質的に分類され、養育者にフィードバックされた。

4. 研究成果

【研究項目(1)】 ビデオ刺激を用いて、生後1年間の4時点において養育者の情動認知と認知のために利用する文脈について縦断調査を実施した。その結果を基に、28個の情動カテゴリーと7個の情動認知の際に利用される手がかりカテゴリーを作成した。これらのカテゴリーの内容から、養育者は、子どもの表情や行動、発声といった子どもに焦点化された情報だけでなく、遊んでいる対象や、養育者の内的表象(育児態度や育児信念)も利

用して情動を認知している可能性が示唆された。この過程については国内外の学会で発表を行い論文として公刊した。

また、作成したカテゴリーを用いて養育者による子どもの情動認知と認知する際に使用する手がかりの発達プロセスのモデル化について分析を行った。その結果、子どもが9か月時点で発達プロセスの変化が認められた。9か月という月齢は、言葉の前段階である指さし行動が発現し、重要なコミュニケーションスキルとしての共同注意も認められる時期である。情動が分化し、子どもの情動表出も豊かになる9か月時点において、養育者による子どもの情動認知と認知する際に使用する手がかりの質的变化が生じることが推測された。この過程については国内外の学会で発表を行い加筆修正した内容での論文を準備中である。

【研究項目(2)】研究項目(1)で作成されたカテゴリーを用いて、0歳児を子育て中の養育者71名を対象にして、養育者による子どもの情動認知と認知する際に使用する手がかりのメカニズムのモデル化について分析を行った。構造方程式モデリングを用いて分析を行った結果、読み取る情動の数、文脈の数といった母子相互作用要因と、母親側の要因である情動知能の両方の要因が、育児困難感と関連することが示された。この過程については国内外の学会で発表を行い加筆修正した内容での論文を準備中である。

【研究項目(3)】子どもの情動がわからず育児不適応を生じている養育者の適応的な子どもへの関わり方を体験的にトレーニングする情動認知発達プログラムを開発するために、養育者と養育者自身の子どもとの相互交渉場面のVTR記録に基づき、養育者による”子どもの情動状態を読み取る能力”(養育者による子どもの情動認知と使用する手がかり)

り)についてインタビューを行った。インタビューの内容は研究項目(1)、(2)で生成された発達プロセス及びメカニズムの複数のモデルとの比較検証により質的に分類され、養育者にフィードバックされた。この過程については、現在基礎的なデータ収集と分析を行っており、データ数を増やして国内外の学会での発表及び論文を準備中である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

小原倫子.

Process of Change in Mothers' Abilities to Perceive Infants' Emotions.

岡崎女子短期大学・岡崎女子大学研究紀要, 第47号, 11-15, 2014.

小原倫子、丸山笑里佳、岸本美紀、その他2名.

子育ての悩みと、親と子どもの発達センターの役割に関する一考察 - 親と子どもの発達センター利用者の質問紙調査から - 学術教育総合研究所所報, 第7号, 1-9, 2014.

小原倫子、谷田貝雅典、岸本美紀、その他2名.

地域における子育て家庭の状況及び需要に関する発達の变化の実態調査 地域活性化研究, 第13号, 11-17, 2014.

小原倫子、上嶋菜摘.

養育者による“子どもの情動を読み取る能力”のカテゴリー化 - ビデオ刺激の活用による検証 - 岡崎女子短期大学研究紀要, 第46号, 9-13, 2013.

[学会発表](計6件)

小原倫子、石井僚.

Process of change in mothers' ability
to perceive infant emotion.
The 17th European Conference on
Development Psychology. Porto
(Portugal) 2015 .(査読あり)

石井僚、小原倫子.
Relationship between Emotional
Intelligence and Perception, and
Sense of Difficulty with
Child-Rearing in Mothers of Newborns.
The 17th European Conference on
Development Psychology. Porto
(Portugal) 2015 .(査読あり)

小原倫子.
Developmental Changes in Mothers'
Perception of Infant Emotion and Use of
Context. The 13th European Congress of
Psychology. Stockholm (Sweden) 2013 .
(査読あり)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小原 倫子 (OBARA TOMOKO)
岡崎女子大学・子ども教育学科・准教授
研究者番号：10450032